

漂泊の歌人

吉井勇

『命短し恋せよ乙女』のフレーズで有名な『 Gondola の唄』は、現代までに多くのアーティストが歌声を重ねてきた名曲です。

さて、皆さんはこの名曲の作詞を読まれた吉井勇についてご存じでしょうか。「はじめて名前を聞いた」という方から、「曲は知っているけど詳しくは知らない」といった方もたくさんいるのではないのでしょうか。今回は、そんな皆さんにぜひ読んでいただき、知るきっかけにしてほしい特集です。

東京で生まれ、歌人、劇作家、小説家として活躍した吉井勇ですが、その半生の中で勇が傷心し、打ちひしがれてたどり着いたのが、現在の香北町猪野々でした。勇はここで『溪鬼荘』を構え、短い期間ではありますが隠棲し、再び立ちあがっていきます。勇にとって猪野々は、人生において最も悩み、苦しみの深かった時期に、己を見つめ直し、心の安らぎや希望を見出すことのできた、非常に大きな意味を持つ場所でした。現在、猪野々には吉井勇記念館が建てられ、訪れる人を自然豊かな風情溢れる景色で迎えてくれます。

本特集では、勇の生涯を振り返り、作品などを掲載しながら勇と香美市のつながりをご紹介します。

Gondola の唄

いのち短し、戀せよ、少女、
こひをとめ

朱き唇、あ褪せぬ間に、

熱き血液の冷えぬ間に

明日の月日のないものを。

いのち短し、戀せよ、少女、

いざ手を取りて彼の舟に、

いざ燃ゆる頬を君が頬に

こゝには誰れも来ぬものを。

いのち短し、戀せよ、少女、

波にたゞよい波の様に、

君が柔手を我が肩に

こゝには人目ないものを。

いのち短し、戀せよ、少女、

黒髪の色褪せぬ間に、

心のほのほ消えぬ間に

今日はふたゝび来ぬものを。